魚と水　Uo to Mizu (47-2)：1-3, 2010

羆がアリに足許すくわれる・・

河村　博

道立試 22 機関の地方独立行政法人化が目前にせまった平成 22 年 3 月下旬、道立水産孵化場総務部から場長室にとつぜん報告が入った。

「入り口にある標柱を、さけます・内水面水産試験場の標柱に換えようとしたところ、たいへんなことが判明しました。」

「・・・・。」

「サケを咥えた木彫りの熊の支柱、2 本が‥。」

旧北海道立水産孵化場が昭和 60 年に、札幌市中の島から現在の恵庭市北柏木に移転して 4～5 年が経過しようとするころ、入り口道路がまだ関係者に周知されないことを憂いた当時の場長の働きかけにより、孵化場の取り付け道路入り口に、大きなサケを咥えた木彫りの熊と表札が置かれることになった（この経緯は魚と水（46）に詳しい）。

爾来、この木彫りの熊は、移転された水産孵化場とともに歩み、職員、来場者、散策者、そしてキタキツネや野ウサギ、果てはアライグマまで、その往来を見守ってきたのである。

何せ、りっぱな木彫りの熊であった。

それが、自分の顔の 5 倍以上の大きさのサケを咥えて正面を睨む。睨む。

木彫りの熊が置かれた当初、来場者はかならず、この熊のことを話題にしたものである。

「孵化場のシンボルとしてふさわしい標柱ですね。」

そのうち木彫りの熊は、来場者の話題に上らなくなった。

風雨に打たれ、厳しい冬の寒さや積雪の重みに耐えているうちに、周りを威圧するような尖った雰囲気がうすれ、周囲の木立や草本に溶け込んできたのであろう。

羆は北の大地、北海道の自然の頂点にたつ野生動物である。北海道に開発の手が及ぶまでは、人（アイヌ）との間でさえ神（キムンカムイ）としてあがめられ君臨してきたのである。

厳しい北国の冬を巣穴でやりすごした羆は、春から初夏にかけて、やわらかい蕗や草木の新芽を食べてくらす。

暑い夏の羆は、どのようにしてくらしているのだろう。

気温が充分上がりきらない朝方早く、あるいは日中の気温が下がる夕方おそくに食事に出てくると思われる。しかし、詳しいことは分からない。

ただし、この時季は豊富に活動する昆虫類、特にアリの巣を壊して、そのなかの幼虫などを食べるらしい。また、蜂の巣をおそうことも、季節とともに花の蜜を追って移動する養蜂家の間ではよく知られていることである。

秋の北海道は豊饒の季節に変わる。山にはヤマブドウ、コクワがたわわに実り、川では急にあたりが騒がしくなる。鱒（カラフトマス）や鮭（シロザケ）が、長い北洋の旅から産まれた川にもどってきたのである。

わずか 1 グラム前後の体重で川を下った稚魚たちが、もどった時には 2000 グラムから 5000 グラム（数千倍あまり）になる。体はすべて海の栄養でできている。

彼らは重力の法則に逆らって、海の栄養を川の上流まで持ち上げるのである。さけの仲間のこのはたらきを、「生物ポンプ」と呼ぶ所以がここにある。

秋の羆は、そこで存分に鱒や鮭を捕らえて食らい、その周辺に糞や食べ残しを振りまいてゆく。食事中の羆のまわりには、大鷲や尾白鷲、キタキツネが見られるが、そんなことには目もくれない。

羆は、北海道では野生動物の頂点にたつ神なのである。

羆にとって怖いものはないのであろう。

さて、旧水産孵化場のサケを咥えた木彫りの熊に話をもどそう。

新体制の名称変更のため木彫りの熊の標柱を別の場所に移動しようとしたところ、何としたことか、支柱 2 本の丸太がぼろぼろに腐り、なすすべもない状態であることが判明したのである。

慎重に移動して調べたところ、木材の腐食は支

柱にとどまらず、木彫り全体に及んでいることも判明した。正面から見た様子は何事もないかのようであったが、その裏側では、密かにシロアリの浸食が進行していたのである。

残念であった。これからも末永くわれわれを見守ってほしいと願っていたにもかかわらず、迂闊なことであった。

本来は羆の餌となるアリによって、反対に木彫りの熊の命が奪われたことになる。皮肉な結果と言わざるを得ない。

新しくさけます･内水面水産試験場が発足した、平成 22 年 4 月下旬､折しも丹保理事長一行が来場された日の夕方に、最後まで原型を保っていた水産孵化場の看板と木彫りの熊の一部を囲んで場員の記念撮影が行われた（写真１）。

そのときの写真がこの一枚である。

当日は忙しい中、木彫りの熊の原稿を魚と水に執筆された岡田鳳二元場長も駆けてつけてくだされた。

形あるものは壊れる。形を維持していくには、常に変化しつつづけることが基礎となる。

日頃の目配りと気配りが肝要であるが、残念なことにサケを咥えた木彫りの熊には、配慮が欠けていたと言わざるをえない。

さけます・内水面水産試験場の研究体制も同様であろう。将来に向けて常に変化し続けることが、北海道そして当場の発展にとって欠かすことができない。日々の研鑽の積み重ねの結果がわれわれの現在そして将来を決めてゆくのである。

（場長　かわむらひろし）

写真１　職員らによる記念撮影